

労はしなかったが、食糧事情の悪いことと寒さには悩まされた。

二十一年の六月、機関車の脱線事故で手を負傷し、半年ほど入院。その後地上勤務になり比較的軽作業に従事した。

二十二年四月ごろから「ダモイ」話が持ち上がり、それが現実となり、七月下旬、帰国第一便にて懐かしの日本に帰ることができた。

帰国後はもとの学校に教諭として復職でき、郡山市内の小学校を定年まで勤める。その間、代々続いた宮司の勉強をして神職正階になり、退職後は専ら神社経営と人権擁護委員として社会のため多大な貢献により数々の賞を受け、抑留で学んだ教訓を胸に活躍している。

(福島県 宗像 次男)

終戦、ソ連抑留に思う

兵庫県 田中 護朗

一、ソ連不法越境シ我が軍ト交戦中！

終戦当時、私は、満州西南部の承德に駐屯する第百八師団司令部付将校で、参謀部に勤務していた。

八月八日夕刻、「ソ軍ハ東北部国境ヨリ不法越境侵入シキタリ我が軍コレト交戦中」との方面軍司令部からの情報が部内に通達され、急に部内が騒々しくなった。私も何とはなくイライラしていた。参謀部の会議が再度開かれる。

二、敵の侵入を阻止せよ！の師団命令を

私は、翌九日早朝からモンゴル国境の林西陣地警備隊へ、師団命令下達、作戦、行動細部指示の任務を帯びて飛ぶことになった。この部隊は私が本年二月までいた隊で、兵員百五十で、当時としては装備もよく、士気も高いよい部隊だった。司令部から北西方向二百

六十キロのところに位置していたのだが。

師団命令細部の通達及び警備隊長の意図を確認して帰るよう指示を受け、承德飛行場よりスーパ―八型機で林西に飛ぶ。昼過ぎに着いた。警備隊長の柴田中尉は待っていた。茶色の大型封筒におさめられた命令書、作戦の細部指示、地図等を渡し、酒井参謀からの指示も伝えた。この命令は今なお私の脳裏に焼きついたように残っている。二六四陣地警備隊ハ前方ノ陣地ニ抛ルコトナク遊撃隊ヲ編制シ興安嶺付近ニオイテ遊撃ヲ展開シ主力ハ林西一赤峰道（距離は約二百キロメートルある軍用道路である）ノ橋梁道路ヲ破壊シ敵ノ進入ヲ阻止シツツ師団主力ニ追及スベシ爾後師団長ノ直轄中隊トスル」だった。

三、孤立したこの小部隊の運命は？

夕方、柴田中尉に別れを告げ帰路についてからも、この小部隊の先々のことなどを案じ、いろいろと思いをめぐらせ、無事を祈っていた。抑留中、復員後も、柴田を探すすべもなく日を送っていた。

昭和五十八年五月、一五四部隊の戦友会があると聞

郷の同年兵荻野善作君から聞き、私の出身部隊でない
ので、共に戦った戦友はいないのだが、柴田中尉の原
隊なので、もしかと思い荻野君と同行した。鳥羽の
「鯉池」という旅館だった。三十三名かが出席してい
た。三十八年ぶりだ、だれの顔を見ても全然わからな
い！ 参加者名簿で氏名を確かめてみる。いた！ 来
ていた！ 柴田がいた、生きているのだ！ 部屋は二
階だった。入口に部屋割りの紙が張ってある。柴田岩
太郎の名があつた。三十年ぶりに会った柴田は頭は白
く薄くなつて、少しやせていたが、確かに柴田だ、面
影ははつきりと残っている。柴田は私いだれだかわか
らないらしい。「田中です、林西で別れた田中中尉で
す、司令部の…」柴田は大きな口をあけて「ああ
…」とびつくり仰天！ 二人は年をとったが、互いに
握り合つた二人の手は熱い熱い血が通うような感じが
した。

宴席も早々と立ち、二人は夜を徹してお互いの昔の
思い出を語り合い、無事を喜び合った。私の予想のよ
うに、部隊の損害は大きいものだった。参戦時の百五

十一名の隊員中、五十四名が生き残り、終戦後ソ連に抑留されたとのことで、いかに至難な任務であったかを物語っている。大部分の者は戦死だが、朝鮮人の特別志願兵は全員が逃亡、現地召集兵の離脱もあったという。柴田とは現在、年賀状の交換程度で会うこともかなわなくなったが、元気で部下の分まで長生きしてほしいと思う。

四、師団司令部は移動

八月十一日、司令部は方面軍の命令どおり列車輸送をもって一切を錦県に移動した。私たち後方は、陣地構築用の資材の徴収収集に東奔西走していた。当時は、一年でも二年でもソ軍の侵入は阻止すると考えていたのだ。

五、敗戦？

昭和二十年八月十五日は朝から参謀部での住民掌握、指導の会合が開かれていた。正午に陛下のラジオ放送がある。と防空通信部から通知があった。何かな！と思っていた。司令部のスピーカーから「天皇陛下の……」とアナウンサーらしい声が聞こえたが、雑音が

大きく入ってきて皆目聞き取れない。陛下のお言葉だとはわかるのだが、とにかく頑張れと励まされているんだろう！といって散会した。昼食をとって出かける支度をしていると、内藤中尉が「命令だ命令だ」と参謀室に駆け込む。入れかわりに小谷中尉が「集合集合」と叫ぶ。皆集まった。参謀長たちは師団長室に入っていたが、酒井参謀から停戦だ！と。方面軍命令「畏きあたりにおかせられては戦争終結に決せらる隸下部隊は御意を體し萬遺漏なく対処すべし」「速やかに連絡將校を差し向けよ〇〇三」との簡単な電文だったと記憶している。

佐藤参謀と私が、連絡將校として奉天の第三方面軍司令部へ錦県飛行場から飛んだ。参謀部に案内され、後方担当の広瀬参謀から機密書類の焼却処分、糧秣被服の確保、兵器彈藥等を軍命令によりソ連に引き渡す（所謂武装解除されること）等、口頭指示を受ける簡単なものだった。帰途の飛行機を頼んだが、だめだった。傍らにいた参謀が「國際彈圧は厳しいものだ」とつけ加えた。「司令部の將校集会所で夕食の給与を受

け、街へ出てみた。

大混雑、大混乱だ！ 当時だから自動車こそないが、駄馬が行き交うその間をモンベ姿や巻脚絆姿がバタバタと駆け抜ける。みんな大きな荷物をさげたり担いだり。むんむんと蒸すようなたまらない暑さだが、だれも彼も一生懸命なのだ。日本人の渦巻きだ。翌十六日早朝、便衣（中国の土民服）に着がえ丸腰になって、乾パン二袋を腰にさげ、短く切った木銃を携えて満鉄の線路を歩く。たしか七つの駅があつたと思う。途中、幾度か満人に囲まれたが、丸腰だったので無事逃れることができた。翌々日の夜十一時過ぎに師団司令部に帰った。高級参謀に報告。ついにこの戦争に敗れたのだという口惜しさとあきらめと、これから先はどうなるのかとの大きな不安をも感じていたが、生きている、帰りたいという願いが大きかった。

六、武装解除

八月二十日夕刻、ソ連戦車、トラックが入ってきた。意外に早く来た。初めて見るソ連兵だが、口焼けた赤い猿のような顔つきで、子供のような若い兵隊だ。

よれよれの服にボロボロ長靴姿だが、眼だけ光っている。戦車はベテラだろう。六輪トラックはGMCアメリカ製だ、西部戦線から来たのだろう。相当疲れているようだが、でもやつらは勝ちいくさ、こちらは敗残兵だ。悲しい境遇にあるのだが、「この火事場泥棒め！」と激しい憤りが私の胸いっぱいこみあげた。あらかじめ集積した兵器、弾薬は一切をソ軍に渡した。我が魂としてきた軍刀を渡すのは本当につらい気持ちだった。

七、移動

九月に入っていろいろなデマが飛び回る日が続いた。出発らしいぞ！ 十三日、あす出発だ、喜び勇んで支度。司令部の人員は百五十名くらいだったから大したことはないのだ。武装解除後は司令部などという機能は全く無用で、何から何までソ軍に直接管理されているのだ。集合、出発、各自手製の背負い袋をかついで、行き先はわからないが、帰国なのだ。歩いた歩いた三日間、大羊、盤山^{ばんざん}を経て奉天省海城に着いた。砲兵連隊の兵舎に着いた。

既に日本軍が入っていた。集結地らしい。二棟の兵舎に分かれて入った。ここには第三方面軍司令部や一部関東軍司令部、それに隷下師団の将校、当番兵、下士官らが集結していた。後にわかったのだが、関東軍の将校で編制した第八梯団と言っていた。三百五十名くらいだったと思う。集結した上、やがては日本に帰れるものだとだれもが思っていたから、大した不安などなかったので、のんびりと過ごしていた。

「生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪禍の汚名を残す勿^{なほ}れ」と厳しくたたき込まれていたのだが、捕虜となっても大勢だと観念も変わってきて、あきらめもつき、少しのんきになっていったようだった。

ここに落ち着いてからは、ソ軍の指示で雑多な作業があった。主に海城停車場での貨車への積み込みだった。周辺の工場施設、特に鞍山製鉄所から運んだ煙突、耐火煉瓦など、あらゆる資材を積んだソ連は、泥棒そのものだと思う。ここでの生活は、約二カ月近く続いた。満人が柵越しにパイチューや饅頭を持って交換に来る。ソ連兵にロシア語を習ったりして、のんびりあ

きらめムードだ。

八、待ちに待った日が来た。ダモイだ！

十一月十六日、前日から持ち物整理、上装の冬衣袴に着がえ、八時過ぎから舎前に出て室ごとに整列。ソ軍輸送指揮官？カピタン（大尉）が立ち会って個別点呼を受ける。呼ばれた者は別に列をつくっていく。一車両ごと四十名がまとまって海城停車場へ向かう。駅に着くと引込線に有蓋貨車が十五両くらいとまっていた。私たち参謀部の者は八両目だった。後方の車両はドアがしまっている。糧秣か何か積んでいるのだろうか。豚も積んでいるのか、ギャーギャー鳴き声が聞こえる。貨車は両側に幅二メートルぐらいの重い戸がついている。これが乗降口だ。車内は長さ六メートル、幅は二・五メートルくらいだ。中央部にダumasストープ、煙突は天井の上に突き抜けている。ストープのすぐ隣に床を切り取ってつくった便所穴が開いている。車内は前後ともに木材で上下二段に仕切って乾草が入れている。そこへ各自が携行した毛布とか携帯天幕などを敷いたりかぶったりして寝そべるのである。高さ

が一メートルくらいだから、どうにか座れるくらいである。外部には丸の中にローマ字のMの字の大きなマークがついている。もちろん満州鉄道の貨車だ。ハトン車だろうか。機関車も満鉄のミカロだ。後日、感づいたことだが、極東鉄道もシベリア鉄道も広軌で、共通する鉄路なのだ。

ソ連兵が二人連れで車両ごと、乗り終わるのを急がす。ブイストラ、ブイストラ！と。みな乗り終えると戸を閉め、外からガチャン！と錠をおろす音が。車内は真っ暗だ。ストーブの煙突の穴の周りに少し明かりが漏れてくる。前後についている換気孔はふさがれているようだ。用意のよい者もいるものだ、燭火しよくかをともしてくれた。だれもがホッとしたのだろう。その日は携行食だったから、昼夕食とも各自いつとはなしに喫食していた。夜光の腕時計は八時過ぎを指している。あちこちでの談笑もやがて途絶えて、みな静かな眠りについたようだ。みな安心したのだろう。私も何となく希望のようなものを感じ、いろいろと思いをめぐらすうちに頭の中がさえてきて眠れなかった。ふと目を

覚ますと、煙突穴から光がさしていた。七時前だ。そのうち、みんなが起きてにぎやかになってきた。

九、おかしいぞ！ 方向が！ 車上三日目だ。

貨車に乗ったとき、みんなの話は、機関車が北についているから大連直行ではないぞ、奉天―新民―錦県を南下、朝鮮からだというのが大方の見方だったが、逆に北へ走っているようだ。磁石だけでは断定できないが。

八時前停車した。やがて監視兵がやってきて、貨車の錠をガチャンと外してダワイと叫ぶ。宮田大尉（ソ軍のお気に入りの主計大尉だ）と通訳もついてきている。「朝食を分配するから十一両目に来い」と。一面に雪が積もっている。北へ来た！ と思ったが、全然どこだか見当がつかない、不安がいつぱいだ。いろいろ想像してみるが、全然見当もつかないまま幾日か過ぎていった。そのうちだれもがあきらめに近い気持ちに変わっていったようだ。それでもあきらめ切れず逃亡しようとして射殺されたり捕まった者もいた。後日思い起こすとはかげたことのようにも、抑留中その

時々と考えていたこと、行つたこと、それはみな真剣に命がけでやつてきたのだ。

十、ソ連に来てしまった。どうなる。

十二月十三日ごろだったと思う。極東鉄道を北へ、ハバロフスクは過ぎてクラスノヤルスクで丸一日停車した。入浴するという。貨車から降りて歩くのは久しぶりだ。カチカチに凍つた雪の上を歩く。刺すように痛く感じる寒さだ。浴場といつても駅に付属する消毒場というようなもので、中はドラム缶を床下に連ねて並べ、まきをたいて室温を上げる。言うなれば簡単な蒸しぶろだ。二リットルくらいの手桶に二杯の湯をもらつて体を拭うだけ。防寒外套初め着衣一切を一まとめにして大きな鉄のかぎにしばりつけ、ドラム缶の火で熱した室に入れて、いわゆる熱気消毒をするのである。シラミ退治なのだ。

シベリアを通過中、一日に一、二回、多いときは五、六回も停車することがある。単線の部分がかなりあるのだらうし、ダイヤ調整や、石炭、水の補給などもするのだらう。そんな基地の停車場につくと、長時間戸

を開け、線路上へも出してくれる。

ここで大小便の用を足すのだが、ロスキーマダム（おばさんたち）が物の交換に来る。また付近の住民も見物に来るのだが、彼女たちの目の前で用を足すのが何よりもつらかった。小便是貨車に向かつてやればいいが、大便にかたまつた尻を見られるのも、前を見られるのも処置なしだ。今でこそ笑い話でお互いすましているが、こんな恥辱を感じたことはこのとき以外にはない。マダムたちがサバーク？と言つた。犬だと言われたのだ。停車するところによつては線路上の雪の上になりに多くの人糞がたまつていたことがあつた。既にこのシベリアへ送り込まれた日本人の多いことも想像できた。不安とあきらめ、そしてどうにかなるだろうと思う淡い希望とが入り乱れ入れかわるという、本当にそれは切ない日々が続いた。

現在思い起こしてみると、このころは抑留の初めて一カ月たったばかりだが、これから三年六カ月もいるのだとわかつたらどうしただろうか？ 逃亡したかあるいは自殺したかもしれない。みなそうだろうと思う。

……スコラダモイ！ スコラダモイ！（間もなく帰るのだ！）とソ連人にだまされながらも、そのうそを信じたり腹を立てたりしながら、飢えと寒さ、加えて栄養失調、病氣、けがなど、種々苦しみに耐え、生きて故国の土を踏むことができたのは本当に不思議である。

十一、ソ連抑留に思う

私は、関東軍の一将校として敗戦も深く認識し、終戦を迎えた。終戦時の隷下部隊の動向を把握し、以降私に課せられた任務の遂行の中で、生と死の境地をさまよう多くの体験をしてきたが、生命永らえ今日いまだ生きている。過ぎた五十数年間の戦中戦後の記憶は、死ぬまで私の脳裏に焼きついたまま消えることはない……と思う。

今日までに、多くの方々のあらゆる参戦や抑留に関わる貴重な記録、切なる訴えを数多く拝読してきた。お互いが体験者として胸打つものばかりだった。戦場に倒れ、また終戦後にソ連の不法抑留に遭い、生き地獄を味わいながらシベリアの広野に埋もる我が友たち

に深く追悼の誠を捧げ、衷心よりご冥福をお祈り申し上げるものである。

我が全抑協兵庫県連では、平成五年三月、全国にさがけ氷上郡氷上町横田長者山に抑留者慰霊の碑「平和の礎」を建立し、六百数十字から成る建立誌を碑表に刻み、この惨事を銘記し、史実を後世に伝えることとした。許されるなら、この文言をここでお伝えしたい。左のとおりである。

祈念碑「平和の礎」 建立誌

大東亜戦争は昭和二十年八月十五日……戦争終結が宣せられ日本の新しい歴史の幕ひらく。

海外に在りたる陸、海、軍人、軍属三三〇万、一般人三三〇万人はポツダム宣言に基づき故国に送還されつつありたるも、終戦に前後してソ連は日ソ不可侵条約を破棄し満州、北部朝鮮及び我が国北方諸島に侵攻し来り、武装解除したる日本軍人、軍属、民間人等六十数万人を自国の開発、復興等の労働力に資せんと、ポツダム宣言に違背し捕虜として拘束威圧し、シベリアをはじめソ連各地に強制連行せり。その惨状筆舌に

尽きず。即ち食糧、衣服の欠乏、雨露を凌ぐばかりの

幕舎、バラックの粗雑な宿舎、医療の不備等劣悪なる

環境下に拘置し、連日、道路、鉄道、ガスパイプライ

ンの建設工事、森林の伐採、炭坑内作業、或いは工場、

農場……と過酷な重労働、危険を伴う作業をも強制さ

れ事故死も少なからず。加えて冬期は零下三〇数度を

超える寒気に曝され乍らの永き忍従の歲月なりき。為

に多くは過労と栄養失調に生氣を失ひ生死の境を彷徨

う。医療頗る不備にして、終戦を得たりと雖も堪え難

き屈辱、辛酸に耐えつつも無念、帰国の希いも空しく

シベリアの広野に埋もる我が友六万余名。

兄弟殉国の大義に斃れたりと雖も無念の思い譬うる

に物なし。昔日の兄等を臉に浮かぶるとき万感奥に迫

りて慟哭の涙抑え難きものあり。茲に兄等の御霊に深

く追悼の誠を捧げ、祖国の安泰と再び戦争、惨禍なき

世界恒久平和を希求し併せてこの惨事を銘記し永遠の

歴史に刻まんと此処に祈念の碑を建立す。

平成五年三月吉日

財団法人 全国強制抑留者協会

兵庫県慰霊碑建立委員会

【執筆者の紹介】

一、本 籍 兵庫県氷上郡氷上町犬岡一五七番地

一、現住所 右に同じ

一、生年月日 大正十年二月二十二日生

一、学 業

昭和十三年三月 京都府福知山商業学校を卒業。

昭和十六年三月 大阪府大倉高等商業専門学校卒業。

後、家業に従事。

一、軍 歴

昭和十七年一月 十日 福知山中部第六三部隊に

現役兵として入営、陸軍

二等兵。

同年 五月 三日 広島宇品港出帆。

同年 五月十五日 満州国承德独立守備歩兵

第十三大隊第一中隊に編

入さる。

同年 七月 十日 陸軍一等兵。幹部候補生

志願。

同年 九月 一日 陸軍兵科幹部候補生を命

ぜられ、陸軍上等兵の階

級に進めらる。同日、幹

候教育隊に編入さる。

同年 十一月 十日 甲種幹部候補生に採用さ

れ、伍長の階級に進めら

れて、群馬県前橋陸軍予

備士官学校に入校。第二

機関銃中隊に編入され、

教育を受く。

昭和十八年二月 陸軍軍曹の階級に進む。

同年 四月二十九日 同校を卒業。陸軍兵科見

習士官拝命。同年翌月広

島宇品港出港、教育隊に

復帰す。

同年 九月 末日 関東軍将校教育隊集合教

育を終了。士官勤務を命

同年 十二月 一日 陸軍少尉に任ぜられ、独

立守備歩兵第十三大隊第

四中隊付として、討伐作

戦に従事する。

昭和十九年六月 関東軍築城部林西第二六

四号陣地警備隊長として、

周辺警備討伐に従事する。

昭和二十年二月 部隊の改編に伴い、第百

八師団司令部付参謀部勤

務へ。

同年 三月 任陸軍中尉の内命を受く。

同年 八月 一日 叙従七位、任陸軍中尉の

命受く。

同年 八月 七日 「ソ連不法越境」、我が

軍これと交戦中の情報入

手。以来、作戰命令伝達、

方面軍の命令受領、連絡

に忙殺さる。

同年 八月 十五日 終戦につき、戦闘停止命令受く。敗戦の上、戦争を終結したことになる。

同年 九月 ソ連戦車師団(?)により武装解除を受け、海城砲兵連隊跡に収容される。

同年 十一月 十六日 海城駅出発。貨車輸送により、榆樹屯を経て入ソ。

同年 十二月 二十六日 モルシャンスク収容所に到着、数多くの強制労働に服す。

昭和二十三年六月二日 収容所出発、ナホトカ収容所へ。

同年 六月 十二日 ナホトカ出港。

同年 六月 十四日 舞鶴港上陸、復員する。

昭和二十四年六月 在日連合軍司令部(GH Q)に出頭、当時の状況聴取される。

以上の経歴の方で、全抑協設立当初より氷上郡支部役

員として御活躍を願っています。

(兵庫県 辻 忠男)

わだち

和歌山県 柴田英雄

まえがき

昭和二十年八月十五日といえば、今から五十年前の日本人にとっては、敗戦という厳しい現実に直面して、物質的にも精神的にも生涯忘れることのできない大きなショックを受けた日である。

北朝鮮の咸興で終戦の日を迎えた私は、すでに日本の戦況の不利なことは知っていただけに、ついに来るべきものが来たという感じで、ある程度心の冷静さを保つことができた。けれども敗戦という事実を目前にしては、さすがにこれはただごとではないという不吉な予感はどうしても拭い去ることができなかった。遠く祖国を離れたこの外地で、最後の勝利を信じて昼夜